

## 第七章 南北朝内乱と大掾氏の衰退

後醍醐天皇は武家政治を否定し、天皇親政の古制を復活する理想をもって、建武中興の政治を始めたが、建武三年（一三三六）、武家政治の再興を目指す足利尊氏に追われて吉野に移り、以来明德三年（元中九年、一三九二）の和平合一に至るまで、吉野朝廷（南朝）と足利氏が擁立した京都朝廷（北朝）とが対立した。この内乱期およそ六〇年間は、鎌倉時代から室町時代にはいる歴史の転換期として重要な意義をもっている。

この内乱には、南朝と北朝とが天皇政治としてどちらが正統であるかという道義上の問題が含まれている。それと共に、武家政権の確立を望む武士階級が公家階級の抵抗を抑えて勢力を増大した事情も重要である。さらに諸国の武士が公家階級・大社寺などの所領庄園を実力で横領したので、従来の土地制度に大きな変化が起こり、それにしたがって武士階級と農民階級との支配関係及び武士階級内部の団結にも影響がおよんだ。それまで惣領（宗家）の下に庶子（一族支流）が服属していた同族的結合（惣領制）が崩れて一族の分裂が起こり、同族間の抗争をひき起こした。また戦乱の間に、地方の武士は庄園やその内部の私有地をたがいに争い、上層の支配に反抗し、また利のあるところに味方した。農民もまた庄園領主に服従しなかった。こうして、全国に動乱が続いたが、その動乱の間に、封建制度が大いに発展した。

このような画期的な時代に、常陸では南朝方の勢力が比較的強く、東国における一大拠点となったので、これを攻撃する北朝方との間に激戦が続いた。この時期に、水戸地方もまた禍乱にまき込まれた。その頃、水戸地方は府中の大掾氏の支配下に属したが、その北方に足利氏の支持をえて守護職をにぎる佐竹氏が勢力を増して南進し、ついに大

掾氏は水戸地方から敗退するにいたった。

本章では、この内乱期からその統一直後の応永二十年代における常陸の諸豪族の対立、興亡を説明しながら、水戸地方の情勢を明らかにする。

## 第一節 常陸における南北両朝の抗争

### 小田治久南朝方となる

鎌倉時代に常陸の歴史を推進したおもな豪族には、幕府から常陸守護に任ぜられた小田・宍戸などの八田（はつた）一族（藤原氏）と、平安時代から常陸大掾職を世襲してきた大掾一族（平氏）とがあり、それぞれ筑波・信太郡と、新治（にいほり）・茨城・行方（なめかた）・鹿島郡の方面に勢力を占めて分立していた。このほか、那珂・久慈・多賀郡には、佐竹氏（源氏）が根強い勢力を張っていた。鎌倉末期には、これらの諸氏が南北両朝の抗争にまき込まれて、対立しあるいは連合するなど、複雑な内乱の様相を示しながら、室町時代の初期におよぶのである。

常陸地方に中央の動乱が波及したのは、比較的早かった。元弘二年（一三三二）、後醍醐天皇の倒幕計画が失敗して天皇が隠岐に流されたとき、この計画を助けた万里小路（までのこうじ）藤房は、その年五月、常陸に流罪となり、小田城の小田治久に預けられた(1)。当時治久は常陸守護であったらしいので(2)、その職務により罪人の藤房を拘留することになったのであろう。ところが、翌元弘三年には、鎌倉幕府が滅び、後醍醐天皇の建武中興が成就したので、その年六月、藤房は小田治久を伴って上洛した(3)。この後、小田治久は藤房の推挙によって

後醍醐天皇方となり、建武二年（一三三五）、足利尊氏が天皇に叛き、建武中興の業が破れたのちも、治久はながく常陸南朝方の巨頭として活躍を続ける。

従来、常陸の諸氏と南朝方との接近は、以前から同地方に信太庄をはじめ村田庄・村田下庄・田中庄・南部庄などの大覚寺系統の皇族所領があったためだといわれているが（4）、藤房の小田城幽囚が一つの端緒となったことは確かである。藤房と小田治久との接近には、同じ藤原氏の出身であるので、その同族意識がいくらかあったかも知れない。

## 佐竹氏の発展

佐竹氏は鎌倉時代から久慈郡太田を本拠とし、同郡から多賀・那珂郡などに勢力を占めていたが、鎌倉幕府の滅亡後、佐竹貞義は同じ源氏である足利尊氏に応じ、建武二年七月、北条時行が信濃に挙兵して鎌倉に攻めこんだ時（中先代（なかせんたい）の乱）には、足利直義を助けて鶴見・鎌倉で大いに戦った（5）。そして尊氏が武家政治を再興するや、貞義は常陸守護となり、さらに義篤がその後を継いだ。当時、近畿地方や中国地方では、足利一族やその他足利氏の制覇を助けた有力な豪族たちが守護として一国を支配下に置き、国内の武士に命令するようになり、いわゆる守護領国制が形成された。しかし常陸では、大小さまざまな豪族たちが自立していて、相互に複雑な関係を結び、その上南朝方に属する者もあったので、佐竹氏が国内全部に威令を及ぼす体制は容易に成立しなかった。

それにもかかわらず、佐竹氏は従来蓄積した伝統的な勢力と、守護の権威とを基礎として、常陸南部に向かって支配力を及ぼそうとした。その発展のあとを、その所領についてみよう。

文和四年（一三五五）二月一日、佐竹義篤の譲状によると、嫡子義宣

(後の義宣とは別人) に与えた所領は、次のとおりである。

常陸国佐都西郡太田郷

同 久慈東郡高倉郷・久慈庄

同 久慈西郡多珂庄

同 吉田郡石崎保

同 那珂東郡戸村・小場県

陸奥国中野村・小堤村・佐渡南方・江名村・絹谷村

越中国下支河村

加賀国中林村

さらに、その他の子女や寺院などに対する康安二年(一三六二)正月七日の義篤讓状によると、所領配分は次のとおりである。

小場大炊助義躬分

那珂西郡伊勢畑郷・中泉郷

久慈西郡塩子郷・多珂庄関本郷五分四・南萩津郷五分四・別府村

那珂東郡小庭村

石塚次郎宗義分

那珂西郡石塚郷

久慈西郡遠野村・多珂庄桜井郷・木佐良村

那珂東郡戸村郷

## 乙王丸分

那珂西郡宍沢村東西竹原崎郷内人見左衛門大夫給分、益井村

久慈西郡岩崎郷・多珂庄高萩村・北小木津村

久慈東郡高倉郷・和久村

## 大山福王丸分

那珂西郡高久半分大山村・内田村

## 藤井松王丸分

那珂西郡藤井郷北方内平沢蔵人給分、臼井五郎入道跡、

久慈西郡上村田郷人見修理亮給分、

## 義篤妻分

那珂西郡下泉村

久慈西郡上岩瀬郷

## 小田孝朝妻分（義篤女）

久慈西郡久慈寝村

那珂東郡上野村

吉田郡石崎保

## 那珂通高妻分（義篤女）

那珂西郡佐久山村

久慈西郡別所村

乙御前分（義篤女）

久慈西郡下村田村

佐都西郡伊達村

月山周枢分

久慈西郡下横瀬村半分

京御方分（小場義躬母）

那珂西郡中泉村

御梅局分（乙王丸母）

久慈東郡高倉和久村

勝楽寺領

久慈東郡大里郷内一分方・同名主方

那珂西郡大多口郷并寺辺屋敷田地・太和久田一丁・赤沢村・和気兵  
庫助入道給分

同塔頭正徳院領

久慈西郡福田村

那珂西郡益井枕石屋敷等

正宗菴領

那珂西郡椎尾觀音堂領・太田郷田一丁・益井屋敷等

清音寺領

那珂西郡古内郷勝美沢村・大橋郷平沢蔵人給分

同塔頭獅子院領

那珂西郡春日郷

寿勝寺領

久慈西郡小岩井村

興国寺領

久慈東郡大里郷地頭方大島村

久慈西郡門部郷

以上が南北朝時代の佐竹領であるが（6）、その範囲は常陸北部一帯から那珂川西岸の那珂西地方、南は義篤の子藤井松王丸の領する藤井地区（水戸市）、さらには吉田郡石崎保（東茨城郡茨城町石崎）にまで及んでいたことが知られる。その支族はこの地域にまで進出して確固たる勢力を張ったので、府中大掾氏の北方の拠点として重要な地位を占めていた水戸地域は、佐竹の所領によって南と北から挟まれる形勢であった。

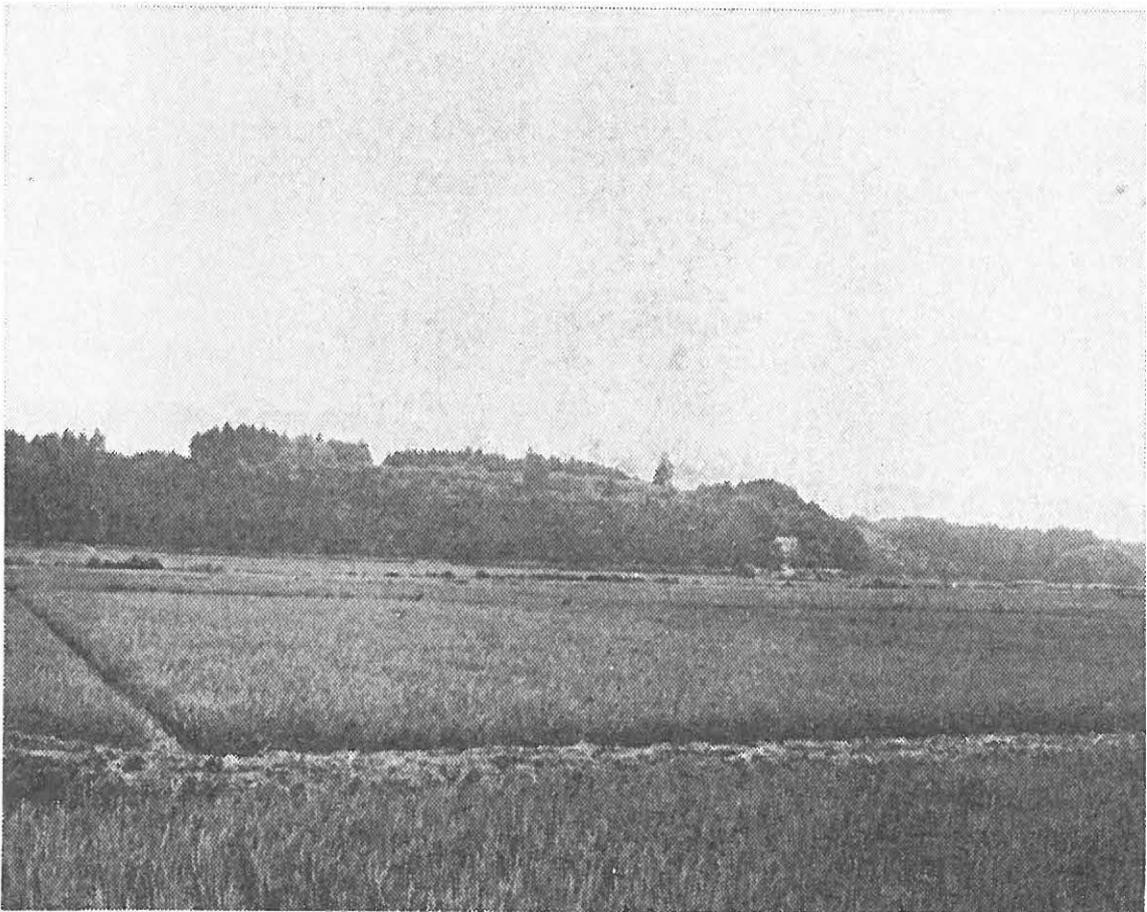
## 大掾氏の北朝服属

常陸の三大豪族のうち、小田氏が南朝方、佐竹氏が北朝方となったが、残る大掾氏もまた内乱の渦中に入ってしまった。

これよりさき、大掾氏は高幹が父盛幹のあと、常陸大掾の本宗を継いでいた。高幹は建武二年七月、北条時行の鎌倉攻めに従い、翌月、足利軍と相模川に戦って時行が敗れたのち、尊氏に降って、その後は足

利方（すなわち北朝方）として行動した（7）。大掾高幹が一時とはいえ、北条時行に味方した事情は、北条氏との縁故、同じ平氏という関係がいくらかあったかも知れない。

大掾氏の足利方服属は一度敵対したのちの降伏であったから、最初から足利方の佐竹氏より立ち遅れの状態とみられる。しかし、鹿島・行方・畑田（かまた）・小栗などの大掾支族も、宗家と共に足利方に付いたらしい。このように大掾氏の来属によって、その本拠府中および南郡の地はいうまでもなく、水戸地域もまたこの時以後、足利方の勢力下に入った。

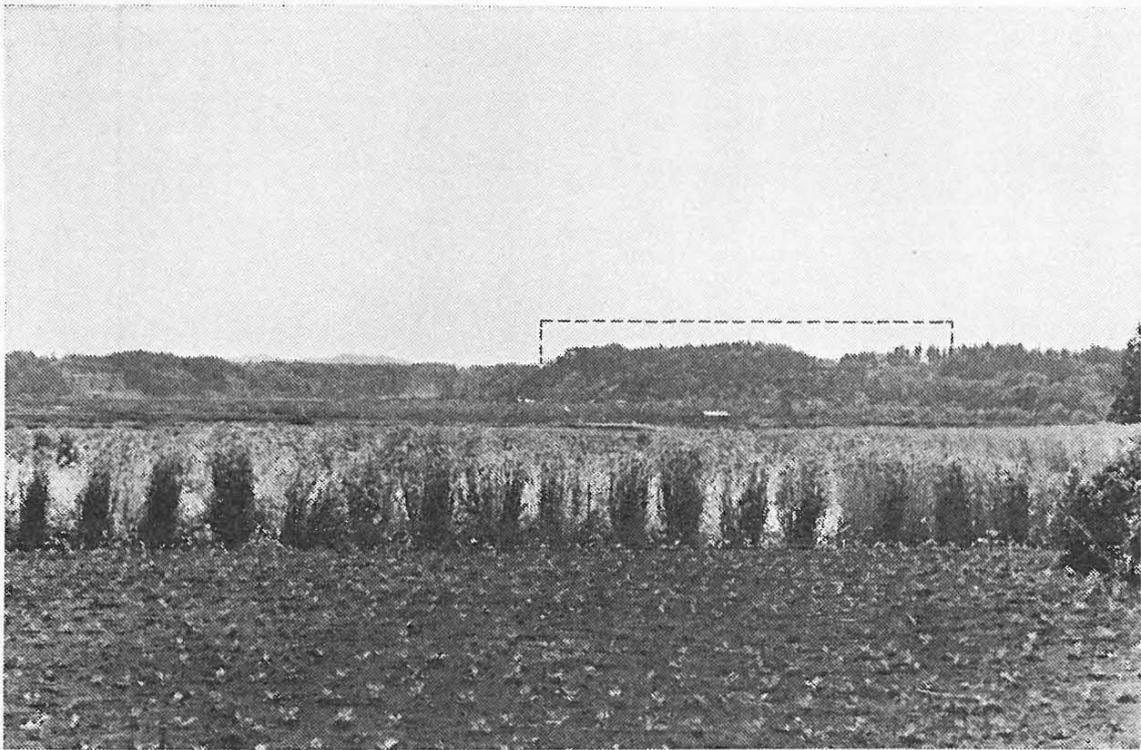


第1図 瓜連城址 — 瓜連町 —

常陸は小田氏を中心とする南朝方と、佐竹氏を中心とする北朝方が激しく対抗し、吉野および九州などと共に内乱がもっとも激化した地方である。水戸地域もしばしば戦場となった。それは、この地域が大掾氏の北方の拠点であり、また両勢力の中間に挟まれていたことにもよるが、とくに常陸から奥州への交通上の要地であること、水戸の台地が軍事上重要であったこと、および青柳が那珂川の渡河点に当たっていたことなどの事情も考えられる。

### 瓜連落城

建武三年（一三三六）正月、常陸の形勢はにわかには切迫した。それは常陸を重視した南朝が、楠木正家を常陸に派遣して勢力の増強を図ったからである。正家は那珂郡瓜連城に入って南朝方を集め、金砂城の佐竹貞義・義篤らと対立した。やがて、小田治久も正家の陣に馳せ参じたので(8)、ここに瓜連は常陸における南北両朝方の決戦場となった。南朝方が瓜連城を拠点にえらんだのは、那珂氏の後援を頼んだためかと思われる。那珂氏の勢力範囲は明らかでないが、おそらく久慈川を北限として、瓜連から下江戸、那珂西城にわたる地域に拠って、北は太田の佐竹氏、東南は水戸の大掾氏と対峙していたのであろう。



第2図 那珂西城址

戸村城址から那珂川対岸の城址（圏点内）を望む。－常北町－

二月六日、正家は佐竹勢と交戦し、佐竹貞義の子五郎義直・六郎義冬らは戦死をとげ、ついで二十五日には、貞義が正家の陣を攻撃したが、このとき那珂一族などは正家に加勢した（9）。

こうして、佐竹の本拠である太田と、大掾氏の拠っていた水戸地域との中間に、南朝方の有力な拠点ができ上り、執拗な抵抗を続けたので、佐竹・大掾の北朝方連合軍もこれを容易に攻略することができず、いたらずに日時を経過した。

そこで、鎌倉府の足利義詮は、足利少輔三郎を遣わし、陸奥や下野の北朝方をして佐竹氏を支援させようとした。一方、南朝方では北畠顕家が義良親王を奉じて、陸奥から東国に南下したので、佐竹貞義はこれを小野沢に防いだ。その結末は明らかでないが、顕家の南下は常陸の南朝方との連繫作戦であった。八月に入ると、佐竹義篤は武生城を

出て瓜連城を攻撃し、小田治久や陸奥から下向した広橋経泰らの軍勢と久慈郡花房山や大方河原などで戦った(10)。やがて、十二月二日、佐竹勢は総攻撃を開始し、久慈郡岩出河原などの激戦の末、十一日ついに瓜連城は落城した。

ここに佐竹氏は常陸北部を完全に掌中におさめた。一方那珂氏一族四三人(一説には三四人)は、太田の勝楽寺うらの独松峰の下で殺されたと伝えられ(11)、同寺にはいまもその墳墓といわれるものが残っている。このうち名前の知られているのは、わずかに那珂通辰一人だけである。那珂一族はここに全滅したが、そのなかで通辰の子通泰だけが難を逃れて、那珂氏の家系を後世に伝えることとなった。何故通泰だけ難をのがれることができたか、その事情は知るよしもないが、いち早く佐竹氏に降服したためか、佐竹一族となんらかの親近関係でもあったからではあるまいか。

太平記によると、貞和六年(一三五〇)八月二十五日、高師泰の軍勢六千余騎が足利直冬方の石見国佐和善四郎のたてこもった鼓崎城を包囲したとき、師泰の軍中から夜討になれた一騎当千のもの二七人をえらび出したという記事があるが、そのなかに、那珂彦五郎という名前がみえている(12)。さきの瓜連の合戦からすでに一〇余年を経ているが、江戸氏系図によれば、これはまさしく那珂通泰の新しい姿とみてよいのではなかろうか。北朝方の佐竹氏に一敗地にまみれ、一族のすべてを失ったのち、北朝方に投じて尊氏の軍に属していた通泰は、このように遙か中国地方にまで転戦し、一族の門地の回復と自らの政治的野望の達成とを図っていたのではなかったか。諸説によれば、通泰は戦功によって、那珂川流域を那珂西よりわずか遡った対岸の江戸郷を恩賞として宛行われたと伝えられている(13)。ともあれ、通泰はこの地を領して、佐竹氏の配下に入ったことは事実とみてよかろう。こ

うして、土地の名によって、通泰はのちに江戸氏の祖となったのである。

なお、一説に、この瓜連の合戦で南朝側の敗北は、大掾高幹が裏切って、佐竹の軍兵を城内に導き入れたためであるとされているが（14）、高幹が前年すでに足利方になっていたことは確かであるから、この高幹反逆説は明らかに成立しない。

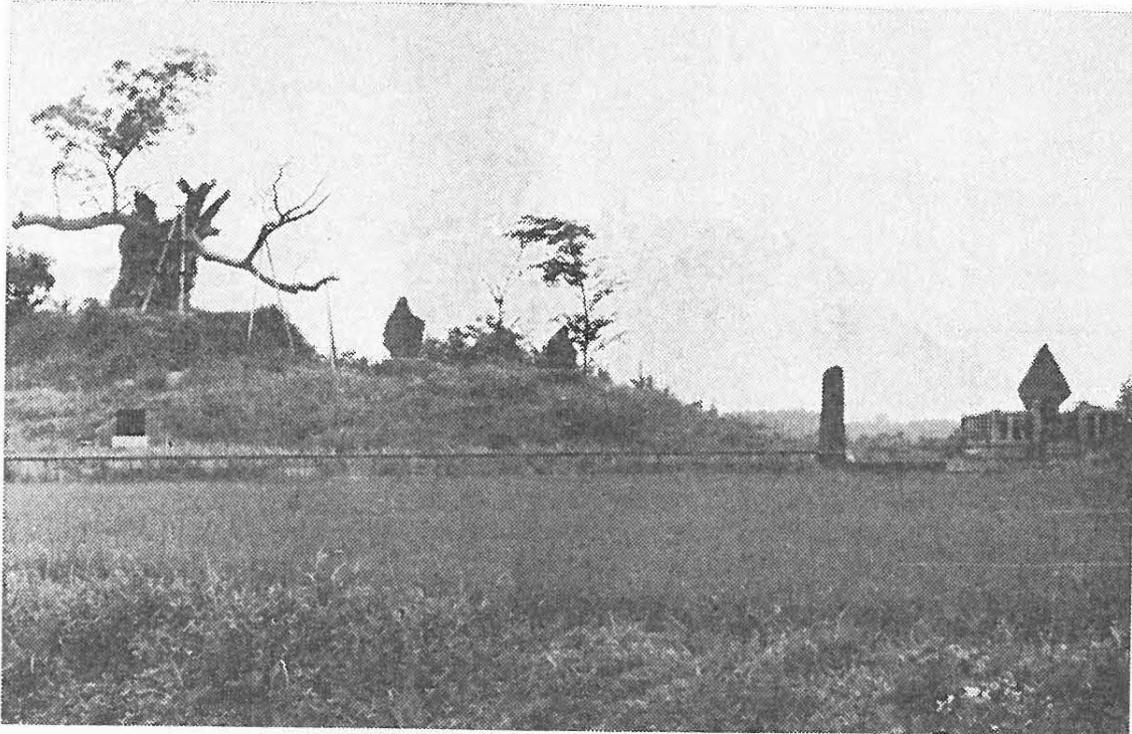
水戸から瓜連にいたる地域は、常陸から陸奥への通路としてきわめて重要であったので、南朝方としては、すでに大掾一族が拠っていた水戸地域を避けて、瓜連城を陸奥との連絡地点とし、また常陸北朝勢力の中心である佐竹氏に対抗するためにも、東国経路上の要衝として、とくに力を注いだのであるが、ついに力尽きて北朝方に敗れた。

## 戦線南下す

この後楠木正家は陸奥にのがれ、広橋経泰は宇都宮にゆき、小田治久は小田城にもどった。瓜連城を陥れた佐竹・大掾らの軍はその勢に乗じて、常陸南朝方の第二の拠点小田城に向かって進撃を開始し、翌建武四年二月二十四日から小田城を攻撃した。ついで三月十日、国府原で合戦が行なわれ（15）、七月に入ると、佐竹義春が信太郡東条城、亀谷城や笠間城を攻めた。このように常陸南部でも北朝方の勢力がしだいに増してきたので、十月、南朝方は奥州霊山に拠っていた春日顕国を常陸に赴援させた。顕国は小田治久らと共に佐竹勢と茨城郡小河郷大塚・橋爪などで戦った（16）。

このように次々と南朝方の諸将が常陸に派遣されたにもかかわらず、その東国経路は一向に捗らなかった。そこで南朝方は捲土重来を期し、延元三年（暦応元、一三三八）閏七月、北畠親房の次男顕信を陸奥介兼鎮守府将軍に任じ、親房らと共に義良親王を奉じて東国に下向させ、

縁の深い東国で勢力恢復を図ろうと長期計画を立てた。



第3図 小田城址 —筑波町—

こうして九月には、親房が霞が浦南岸の東条庄に着き、ついで稲敷郡阿波村の神宮寺城に入った(17)。従来、親房の常陸下向については一般に漂着説が取られているが、藤房の流謫からはじまった常陸と南朝方との関係や、北畠親房の神皇正統記に「常陸はもとより心ざすかたなれば、御志ある輩あひはからひて義兵こはくなりぬ」とあることなどからみると、最初から予定されていた行動であったと思われる。

この後、親房は小田治久や関宗祐を頼って、常陸南朝方の勢力増強を図った。このことを知った佐竹義篤・畑田時幹などの北朝方がこれを攻撃し、幾度か激戦が繰返された結果、十月五日、神宮寺城は陥り、ついで阿波崎城も落ちたので、小田治久の誘導によって、親房は土浦を経て小田城に入った(18)。翌延元四年(暦応二)二月、春日顕国が小田城にきたり(19)、またこの年内に、顕信も鹿島灘沿岸についた(20)。

このように、南朝諸将が相ついで常陸南部に集結したので、この地方における南朝の勢力はようやく活発となろうとした。

## 青柳の戦

ところで、この頃北畠顕信が大掾高幹に招かれて、府中城に入っているばかりでなく、ついで、顕信の奥州下向のために、高幹は一族の石崎権大夫・石川成幹らに護送させ、これを阻止する北朝方の佐竹勢と水戸青柳の地で交戦している(21)。この青柳の合戦に関しては、次のような文書がある(22)。

さたけ(佐竹)勢よせきたり候時、あをやきのしやう(青柳庄)にて、みのしまのなかつかさ(蓑島中務)の子息十郎太郎さいせんのうちし(討死)に候、他にことなる事にて候、向後このむねを心へさせ給へく候也、謹言、

六月十五日 浄水(大掾高幹)(花押)

大せう殿(大掾詮国カ)

これは水戸の地にいた大掾高幹が府中の大掾詮国に、青柳の合戦で蓑島十郎太郎が戦死したことを報じたものである。同文書の朱注には、これを興国元年(一三四〇)の文書としているが、その年か、あるいはその前年の延元四年の文書であるか明らかでない。しかし、顕信が延元四年中に常陸に到着したという事情から推察すれば、一応興国元年のものともみてよいであろう。

このような高幹の行動は、北朝方に属していたはずの高幹の態度としては容易に理解しがたいことである。しかも、こののち、再び北朝方として活躍しているにおいてはなお更のことである。では、このよう

な高幹の動きはどのように解すべきであろうか。すでに述べたように、この頃、常陸南部の南朝方の勢力が再び活気を帯びてきた状勢下に、大掾氏は北畠親房からたびたび勧誘を受けていたとおもわれ、また、中先代の乱でもみられたように、平氏である大掾氏は源氏の佐竹との間に対立感を持つようになったことも考えられる。当時、佐竹氏は足利氏の威勢を背景として、常陸の支配を目指して着々と勢力を伸ばしていたので、旧族の大掾氏としては微妙な立場にあった。一方では、古い庄園制による所領支配がくずれ、他方では、郷村社会がしだいに発展しはじめたこの時代に、佐竹・大掾の間には新旧二つの勢力にありがちな明暗があったと推察できよう。このような事情から、一時的ではあるが、大掾氏は南朝方に接近したのではなかろうか。

## 藤氏一揆

前に述べたように、北畠親房を中心として南朝方の勢力が強化されようとしたが、これに対して、室町幕府は高師冬を常陸南朝方の鎮圧のために東下させた。暦応二年（一三三九）十月、師冬の軍は進撃を開始したが、南朝方の奮戦に遭って、翌年正月、一旦古河から宇都宮に退き、ついで瓜連城で陣容を整えて、好機の到来を待った（23）。

当時の水戸地方には、もとより馬場大掾氏が拠っていたが、さきに述べたように、高幹が南朝方に接近していた頃には、南朝方の勢力がかなり優勢であった。その上、常陸のみならず、諸国でも南朝方の画策がしだいに有利に展開しようとしていた。その矢先、南朝首脳部に内部分裂が生じ、天下の形勢は再び逆転してしまった。

これよりさき、京都では近衛家平の子経忠は、従兄弟の近衛基嗣と藤氏長者を争って、足利尊氏に頼った基嗣に敗れたので、南朝に走った。しかし後醍醐天皇が崩じた後、南朝首脳の親房らと協和しなかつ

たため、興国二年（暦応四）地位の回復を図ろうとして再び京都に帰ったが、ここでも足利氏に容れられなかった。そこで、藤氏一門の結党を思い立ち、下野小山・下総結城・常陸小田の諸氏など、各地の藤原一門に檄（げき）を飛ばして「藤氏一揆（いっき）」をひき起こし、もし一揆が成功して自分の天下になったときには、小山氏は関東管領にするという約束まで取りかわした。このため、小山氏が常陸に在る新田義興を押立てて旗上げをするなどという種々の風説が伝えられ、東国の南朝方は足並みを乱し、その勢力結集に一頓挫（とんざ）をきたしてしまった（24）。このような経忠の行動を、親房は「凡そ事の道理も然るべからざる上、御物狂の至りに候か」と嘆いている（25）。その上、小山・結城などの諸氏は以前から反親房の傾向をもっていたから、藤氏一揆の計画が親房らに与えた打撃は実に大きかった。

## 南朝方の没落

この時、瓜連で佐竹氏の援兵を得て陣容を整え、南下の時機を待っていた師冬は、暦応四年（一三四一）五月二十二日、瓜連城を出発、二十五日には、水戸から宍戸庄垂柳（しだれやなぎ）に至り、さらに大掾氏の拠点である府中や佐谷を経て小田城攻撃に向かった（26）。ついで、六月十六日には小田城に迫り、城背の宝篋塔峯（あるいは三村山ともいう）に陣した。なお、同月十三日には、師冬の指令を受けて、大掾高幹が一族を催して志筑城の益戸国行を破っている（27）。大掾氏は、この頃までには再び北朝方に協力し、師冬の南下とともに、水戸地域の大掾一族もこれに合流したのであろう。

このようにして、師冬を中心とした北朝勢は南朝方の佐倉・東条・亀谷・高井の諸城を抜き、なおも攻撃の手を緩めなかったので、十一月十八日に至り、ついに小田治久も師冬の軍門に降ってしまった（28）。そ

のため、親房はやむなく小田城を出て関城に移り、春日顕国（改名顕時）も、南朝方の志気鼓舞のため常陸に下向した興良親王を奉じて、下妻の大宝城にたて籠った。

この後激戦が繰返されたが、雌雄を決するには至らなかった。ところが、康永二年（一三四三）八月十九日、親房の度重なる勧告にもかかわらず、態度を保留していた結城親朝が足利方に応じ、この日その旗上げが行なわれた（29）。ここに至って、常陸地方における南北両朝の勝敗はついに定まり、関・大宝、ついで伊佐城と相ついで陥り、親房は吉野に帰ったので、翌三年二月、師冬もまた軍を収めて鎌倉にもどった。こののち、春日顕時や甥の右兵衛佐信世らは捕えられ、四月二十四日、その打首は六条河原でさらされた。こうして、親房を中心とした東国経略はついに挫折してしまい、各地の南朝方が東西呼応して京都を奪還する計画は、南北朝分裂後一〇年を経て、なお成らなかった。

この後、南朝方はまったく振るわなくなりましたが、貞和から観応にかけて、北朝方で尊氏と直義がわかれて抗争を起こした隙に、正平六年（文和元）から翌年にかけて一時的に南朝方が京都を占領したこともあった。このように足利氏の内部分裂がしばしば起こったのでその度ごとに各地方に動揺を与え、南朝方の残党を刺激し、あるいは南朝方に結び付くものが出るなど、南朝自体の不振にもかかわらず、動乱は何時果てるともわからなかった。常陸方面でも同様で、観応元年（一三五〇）九月の頃には、常陸などの東国南朝方が蜂起したことが京都に聞えており（30）、翌二年には、直義を追討するために東下した尊氏に招かれた佐竹貞義・義篤らと、直義方に参じた佐竹義盛など、佐竹一族の間でも分裂が起こったがまもなく尊氏は直義と和睦したので、佐竹の分裂も拡大せずに終わった。しかし、この年にも、新田義興が笛吹嶺に挙兵したので、大掾氏がこれを攻めており（31）、ついで、文和元年

(一三五二)十二月には、大掾高幹が鹿島・行方の一族を率いて、下野芳賀郡の西明寺城に拠った南朝方を破った(32)。また、翌二年にも南朝方の土御門某が宍戸山に拠っている(33)、水戸地域の大掾一族との間に戦を交えたのであろうが、その事情は明らかでない。このうち、貞治四年頃まで高幹の消息が伝えられているが、没年は詳らかでない。法名は浄永といった。

以上述べたように、南朝方の瓜連敗戦以来、常陸における南北両朝の抗争の舞台は、小田城を中心とする南部地方に移行してしまっただけで、南朝勢力の一掃された水戸地域は平隠であったと思われるが、先にも述べたように、交通上の要所に当たっていたこの地域は、長い内乱期を通じて、太田や瓜連はもとより、水戸周辺から常陸南部への補給路としてきわめて重要な役割を果たしたことであろう。

注 (1)「増鏡」

(2) 佐藤進一氏著「鎌倉幕府守護制度の研究」

(3)「西源院本太平記」十二、「増鏡」

(4) 吉田一徳著「常陸南北朝史研究」二七〇頁。吉田氏は清水正健著「莊園志料」を論拠としている。

(5) 前佐竹氏譜

(6)「佐竹家蔵古文書」

(7)「畑田文書」、「石川文書」

(8)「飯野八幡社文書」

(9)「常陸密蔵院古文書」、「薬王院文書」、「諸寺文書纂」四所収(金砂両山大権現大縁起)

(10)「飯野八幡社文書」、「相馬文書」

(11)「諸寺文書纂」四所収(金砂両山大権現大縁起)

(12)「西源院本太平記」二十八、三角入道謀叛事并鼓崎城熊故落事

- (13) 大高氏本江戸氏系図
- (14) (4) に同じ。
- (15) 「飯野八幡社文書」
- (16) 「烟田文書」
- (17) 「神皇正統記」、「烟田文書」
- (18) 「関城書考」
- (19) 結城錦一氏所蔵文書
- (20) 松平基則氏所蔵結城文書
- (21) 「常陸大掾譜」「常陸三家譜」
- (22) 大掾裔石川氏文書
- (23) 「有造館本結城古文書写」
- (24) 「松平基則氏所蔵結城文書」、松本周二氏「小田・関・大宝の戦」(大日本戦史六所収)
- (25) 「神皇正統記」
- (26) 松平基則氏所蔵結城文書
- (27) 「税所文書」(楓軒文書纂三十所収)
- (28) 「集古文書」二十四目安類
- (29) 「結城文書」一〇伊勢
- (30) 「園太暦」観応元年九月三日条
- (31) 「常陸遺文」二、「烟田文書」
- (32) 「烟田文書」
- (33) 「真壁長岡文書」

## 第二節 大掾氏の衰退

### 難台城の戦

いつ果てるともわからなかった諸国の戦乱も、室町幕府が尊氏から義詮を経て、義満が第三代将軍となる頃には、ようやく終熄期に入った。戦乱を通じて地方の武士たちはその国の守護の支配下に組み入れられて、守護大名の地方分権の体制ができ上がった。しかも、有力な守護の中から足利一族の細川頼之が選ばれて義満を補佐し、有力守護大名の相互牽制と勢力均衡の上に幕府体制が維持されるようになった。また今川貞世が鎮西探題としてはじめて九州全土を統一し、南朝方の最後の拠点であった肥後の懐良親王や菊池氏の勢力が衰えた。大社寺や諸豪族に対する義満の抑圧政策がつぎつぎに効果を収めた。こうして国内統一の条件が熟してきたので、やがて南北合一が図られるに至ったが、地方ではなお別の動きがみられた。

常陸国では、鎌倉末期まで守護であった小田氏が北朝方に降った後も、依然として従前の地盤により、茂木・宍戸などの一族と結んで勢力を保有していた。いっぽう平安朝以来の旧族である大掾一族は、古い支配体制に依存しながら、なお府中や水戸を中心に余勢を保っていた。これらに対して、佐竹氏は同族である足利との強固な結び付きのもとに、守護としての権威を背景にして、着々と国内武士を結集し、自己の軍事組織を強化し、常陸の領国化を進めつつあった。大掾氏は北朝方に属していたとはいえ、足利氏との関係も浅く、しだいに佐竹勢に圧倒されていき、常陸の政治的中心としては太田が重味を増した。

この新たな勢力関係のもとに、水戸地域は太田から常陸南部への連絡の要地として一層重要なものとなった。佐竹氏としては機会があれば大掾氏を抑え、水戸地域を確保しようと秘かに考えたであろう。た

またまそのきっかけをなしたのが、難台城の戦である。



第4図 府中城址から筑波山を望む

右手下の森は総社神社 ー石岡市ー

これよりさき、関東管領足利氏満は関東一帯に勢力を扶植し、本家筋の義満に対抗しようという下心から、下野の有力な豪族である小山義政をしばしば挑発した。そして義政が鎌倉府に叛いて小山城に挙兵したので、氏満は康暦二年（一三八〇）六月、関東八ヶ国に令して小山義政を討たせた。このとき大掾詮国は、八月二十九日、一族の鹿島幹重らと共に小山氏の館を攻めている（1）。義政はいつわって一旦氏満に

降ったが、弘和二年（一三八二）三月、再び鎌倉府に叛期をひるがえし、上杉朝宗に攻められて自殺した。その子若犬丸は常陸の小田城に逃れた。これによって、下野小山氏の残党は小田氏と手を結んだが、すでに小田氏も以前の勢威はなく、上杉朝宗らに攻められて、元中四年（一三八七）八月、小田城も落ちたので、若犬丸は小田孝朝らと共に難台城（西茨城郡岩間町難台山）に籠城した（2）。この戦に、守護佐竹義宣は小野崎通郷・江戸通高などを遣わして上杉朝宗を援助させている（3）。このときの大掾氏の行動については史料がなく、断定することはできないが、関東管領や守護佐竹氏との間に何らの行き違いもみられなかった時代のことであるから、おそらく上杉氏に与（くみ）して難台城攻撃に加わっていたであろう。

ところで、佐竹義宣の母は小田知貞の女であり、さらに義宣の妹は小田孝朝の妻となっていた。このような関係から、義宣の調停によって、まず小田孝朝らが足利方の勧告に応じて降伏した。そして翌元中五年（一三八八）五月十八日、さしも難攻不落の難台城も、小田五郎らの奮戦むなしくついに陥落してしまった（4）。その攻防戦は常陸南北朝抗争史の掉尾（とうび）を飾るにふさわしい激戦であった。この結果、関東管領の東国における威信が一層高まると共に、守護佐竹氏の勢力も大いに伸張した。すなわち、これまで大掾氏の領域内については、佐竹氏も容易に勢力を拡張できなかったが、この合戦の功によって、佐竹配下の江戸氏が大掾氏の領域内に新たに所領を与えられ、ついに水戸地域内に進出する端緒が開かれたのである。

## 江戸氏の河和田進出

すでに述べたように、南朝方の那珂氏の族滅の後、わずかに那珂通辰の子通泰だけが逃れ、その後足利方に尽した戦功によって江戸郷に

所領を与えられ、佐竹氏の支配下に属していた。江戸郷は那珂氏の旧領である那珂西城などに近く、旧縁の諸勢力との結合に便宜であった。また、石塚から太田に通ずる交通上の要所に当たっていた。これらのことは、江戸氏が家運を再興し、さらに発展するにはきわめて有利な条件となった。



第5図 下江戸館址 —那珂町—

江戸氏は通泰の子通高（通総）のときに、はじめて江戸氏を称したといわれるから、この二代の間に江戸郷を中心に勢力を伸張したものとみてよいであろう。しかも、大高氏本江戸氏系図によると、通高は佐竹義篤の女を娶り、その所領として那珂西郡佐久山村と久慈西郡別所村とを譲られた。前節のはじめに掲げた佐竹義篤の譲状にも、義篤女の中御前（おそらく那珂御前）の分として上述の所領が記されているから、この中御前が江戸通高の妻となった人であろう。したがって、江戸氏はすでに佐竹氏と姻戚関係を結び、その一族同様に重んぜられていたとみられる。かの難台城攻撃のとき、小野崎通郷と共に上杉朝宗の軍に属した江戸通高は、小田五郎の一味である真壁秀幹の背後を突いて、その糧道を断ったので、城中の食糧が尽き、ついに落城したといわれる。しかし、この日通高も討死した。通高の子通実（通景）は、その恩賞として関東管領足利氏満から、大掾氏の旧領河和田・鯉淵・赤尾関などの地を与えられ、江戸郷から河和田城に移った（5）。こうして、江戸氏は滅亡から再生し、有勢の一豪族として水戸地域に登場した。そして衰退しつつあった大掾氏を圧迫し、やがて水戸地域を占有して、大掾氏に代わって江戸氏の時代を築くのである。

## 上杉禅秀の乱と大掾氏

これよりさき、大掾氏では高幹の後を継いだ詮国が至徳三年（一三八六）三月二十六日に没した。詮国ははじめ文幹といい、法名は華峰希香という。詮国が比較的若くしてなくなり、嗣子永寿丸（のちの満幹）は幼少であったので、家臣の左馬助頼国・国貞が府中城において事に当たり、弾正忠久親が水戸にあって一族を治めていたという（6）。大掾氏はこのような状況下で、難台山の戦には十分に活躍することができず、佐竹氏をしてひとり名をなさしめてしまった。そして自己の領域

内に江戸氏の進出を許さざるを得なくなった。このため大掾氏は水戸地域の防備をかためようとしたのであろうか、後世、水戸藩が延享三年（一七四六）城門の立て替えをした折に、もとの城の古中御門の肘木の内面に、三百四十余年以前に相当する「応永七辰建始」という銘文が見出された（7）。このとき大掾氏が居城の修築を行なったことが知られる。この居城の所在地については、水戸の台地、または吉田の台地いずれか異説があるが、おそらく水戸の台地に城郭が構築され、この地域が付近全体の一中心地になっていたことが知られる（次章第一節参照）。

満幹時代の初期は、この地方もしばらく平穏な状態が保たれていたが、やがて再び時代の流れのなかに引き込まれるときが来た。それは関東の大乱（上杉禅秀の乱）が起こったためである。

応永十四年（一四〇七）九月二十一日守護の佐竹義盛が没したが、これよりさき、義盛は子がなかったので、関東管領足利持氏に近い上杉憲定の子義憲（義人）を養嗣子とした。ところが、これに対して、佐竹一門の大族山入氏や国人衆が悦ばなかったため、義憲の国入りができないでいた。義憲は翌応永十五年に管領持氏の後援を得て、反対する国人衆を抑えて太田に赴き、家督を相続した（8）。こうして、佐竹一族のなかでも対立が表面化しようとしていたが、応永二十三年（一四一六）十月二日、足利義嗣はじめ各地の諸氏と倒幕の密約を結んでいた上杉氏憲（禅秀）が幕府に叛旗をひるがえし、関東管領足利持氏を突如襲撃した。これには、関東管領や上杉憲定に対して不満を抱いていた東国の諸豪族や国人衆が禅秀方に加わったので、関東一円は一時に収拾のつかない内乱状態に陥った。

これよりさき、大掾満幹は山入師義の女を妻とした。すでに述べたように、義憲の国入りに山入一族が反対しており、満幹は山入氏と共

に關東管領と意志の疎通を欠いた。しかも、山入師義の女との間に実子がなかったので、上杉禪秀の四男教朝を養子に迎えた(9)。しだいに増強されていく佐竹氏の勢力をみて、大掾一族の前途に不安を感じていた満幹としては、こうして反管領派の禪秀党に与することによって、一門の勢力回復を図ろうと考えていたであろう。こうして、佐竹氏と拮抗(きつこう)する立場におかれた大掾氏は、佐竹の本宗と相容れない山入師義および与義、さらには小田や行方・小栗などの諸氏とともに禪秀党に加わったのである。しかし、やがて室町幕府の支援によって禪秀党はついで、応永二十四年(一四一七)一月十日、禪秀らは鎌倉雪の下で敗死した。ここにさしもの大規模な動乱も治まり、この結果、大掾高幹は管領方に降伏した。

このように、守護の佐竹義人が管領方に属して戦功を立てたのに反して(10)、満幹は禪秀党として管領足利持氏の軍門に降ったばかりでなく、養子の教朝も京都に赴き、継嗣問題も不首尾に終わった(11)。こうして禪秀の乱をきっかけに、大掾氏の勢威は一層弱体化してしまった。

のみならず、この頃、旧支族が本宗の支配を離れて、それぞれの所領郷村などを拠り所に独立していき、本宗の勢力は急激に衰退していった。大掾氏の場合もその例に異ならず、水戸周辺の一族であった恒富郷の石川五郎基国・同左近将監満幹らは、禪秀党となった本宗家と離反して、管領方の宍戸備前守持朝の手に属し、武蔵瀬谷原の合戦、さらに鎌倉雪の下の戦に功をたて

去正月九日、於武州瀬谷原合戦致忠節之条、尤以神妙、向後弥可店抽戦功之状、如件、

応永廿四年二月廿日 (花押) (足利持氏)

石川左近将監殿

という感状を送られている(12)。この後も、山入与義ら禅秀の残党と戦い、戦功があった。

このように、水戸地域を中心とした常陸大掾氏も、同族的関係はほとんど有効な紐帯ではなくなっており、支族は旧来の秩序から解放され、みずからの実力でそれぞれの地域の支配者になっていった。当時の石川氏の所領は、恒富郷の平戸・島田・塩崎・川又・小泉・東谷田・大野三ヵ村などで、血縁的にも地域的にも、水戸の大掾氏ともっとも親近関係にあったはずであるが、その石川氏でさえこのように分立したのである。他の旧支族も同様な経過をたどって、大掾氏から分離していったであろう。こうして、大掾氏は常陸大掾の本宗から一地方領主化してしたが、その上、水戸と府中との間には江戸氏や宍戸氏などの勢力があり、また石川氏の分離などもあったので、しだいに孤立化した。

## 水戸より敗退す

このように、守護の佐竹氏は足利氏と堅く結び付き、難台城の攻略、ついで禅秀の乱などに着々と戦功をたて、常陸における地歩を固めていった。それにひきかえて、大掾氏の勢力はしだいに弱くなり、しかも禅秀党に加わって関東管領に反抗するなど、管領との間柄に円滑さを欠いたので、その間隙に乗じて、応永末頃には、佐竹氏配下の江戸氏が水戸の拠点を奪い、大掾氏の勢力は府中へ敗退してしまった(次章第一節参照)。そして永享元年(一四二九)十二月十三日、管領持氏によって、満幹及びその子慶松は鎌倉雪の下の邸で攻め殺され(13)、ついに大掾氏は水戸地域の勢力を失ってしまった。しかし、常陸大掾の庶流は平安時代以来、府中を中心に、那珂郡から行方・鹿島・真壁の諸郡にわたって展開しており、これらの各地の領主化した諸支族は、この

後もその所領郷村に拠って独自の勢力を養っていた。このようにして、大掾本宗の拠点として、府中について重要であった水戸地域は、これより大掾氏との関係による発展はみられなくなったが、江戸氏の進出により、やがて府中・太田などと共に常陸における地域的中心地をなすに至った。

注 (1) 「常陸誌料」「平氏譜」第三 馬場氏

(2)・(4) 「武州文書」十四 高麗都郡新堀村甚助所蔵、「鎌倉大草紙」

(3)・(5) 江戸氏系図

(6)・(7) 「常陸誌料」平氏譜第三 馬場氏

(8) 佐竹太田松山海江系図

(9)・(11) 「上杉系図大概」

(10) 「喜連川判鑑」、「鎌倉管領九代記」

(12) 大掾裔石川氏文書

(13) 「常陸誌料」「平氏譜第三」「馬場氏」